

新・古典文学論

杉浦明平

創樹社

0091-0033-4249

新・古典文学論

一九七四年三月二五日 第一刷発行

著者 杉浦明平

発行者 竹内 達

発行所 株式会社 創樹社

東京都文京区湯島二―二―一 ☎ 二―一三

電話・東京八一五―三三三一―二 振替東京一五四五八〇

印刷 東京美術 製本 美行製本

© 杉浦明平 1974 Minpei Sugimura

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

新·古典文学論 目次

序章 古典との対決

「風流韻事」を排す——新・古典文学論—— 8

喜劇と悲劇——古典の再評価—— 15

「硬文学」流行をめぐる 20

歌謡史の問題 24

伝統詩について 32

古典復興の意味 38

『木綿以前の事』のおどろき 42

Ⅰ章 古代の民衆と文学

古代歌謡 50

土橋寛『古代歌謡論』 65

文学と歴史の関わる地点——北山茂夫の万葉研究—— 71

『今昔物語』の文体 75

Ⅱ章 中世文学のいざなぎ

中世と文学——乱世の再認識—— 84

軍記物語のリアリティ 88

『平家物語』の方法 99

道元と親鸞についで 114

『歎異抄』の文体 129

狂言の美しさ 137

中世の歌謡 141

「はかなし」と「無常」 145

能にみる『歴史と現代』 147

中世的なものの源流とは何か 149

下剋上の時代と文学 151

応仁の表と裏 159

中世と近世の文学底流 161

Ⅲ章 近世と文学の屈折

江戸文学の摂取について 164

芭蕉試論 190

芭蕉の紀行文 214

庶民文学としての俳句 220

西鶴論に関する覚え書 232

『折たく柴の記』について 244

宣長の詩学 246

雅と俗 250

『夢の代』雑感 265

『統道真伝』のユートピア 262

『蘭学事始』の文学力 268

終章 伝統とはなにか

武蔵の絵 276

森銚三の書評について 282

美の伝統の栄光と悲惨 292

浪漫精神の陥穽 295

うんざりする古典 298

わたしにとって伝統とは 310

●あとがき 313

新・古典文学論

杉浦明平

函・木版画Ⅱ日和崎尊夫

序章
古典との対決

風流韻事”を排す

—新・古典文学論—

日本文学史とくに古典時代のそれほど退屈なものはあるまい。もつとも藤岡作太郎の諸文学史、津田左右吉の『文学に現われたる我が国民思想の研究』のような傑作もないではないが、前者は明治時代の開拓者の情熱にあふれた強い文体によつて後代の鈍重な国文学史類を超えているけれど、すでに半世紀以上のむかしのもので、もう一般には手にもいれがたいし、残念ながら研究者以外には読まれていないようである。岩波書店で二十余年前から藤岡作太郎著作集の刊行に着手しながら、中絶してはまだ完結していないのは、売れ行きとも関係があるのだろう。

後者は日本文化史・精神史から照らした文学の世界であつてそのもつ重大な啓蒙的役割はまだ終つていないといえない。というのは、その社会学的啓蒙的役割の引きつぎ手は今日まで次々に出てきたけれど津田のもつていた視野の広さ、学識の深さ、読みの真率さとりわけ既成の価値観念にたいする破壊的情熱の熾烈さにおいて、津田に比肩しうる文学史はあらわれていないのである。ということからは、個々のモノグラフィイとしてはすぐれた論文もあり啓蒙的な面だけを引きついで文学史が、とくに

戦後、かなり出版されてはいるけれど、総合的に見て、歴史学者津田をこえることができなかったという意味である。

どうしてこのように四、五十年前の古典的文学史をこえることができないのか。

一つには、正直に言って、日本の古典文学そのものが西欧文学ほど豊沃な内容をもたず、近代人にとって魅力にとぼしく、したがって新しい発見にみちた文学史をつくろうという情熱をかきたてないためであろう。さきあげた藤岡の文学史は、文学史の創生期にあつて、未開の分野をきりひらこうという情熱につらぬかれており、津田では破壊的情熱の中に多くの新しい発見がキラキラかやいてゐる。そういう開拓も発見もなくつづられた歴史が、たんなる本の解説と羅列に終つてしまうのは当りまえのことではないか。ともかく日本文学はふつうには万葉集とか源氏物語とか芭蕉、西鶴とか、ごくかぎられた作品しか、魅力を發揮してゐないことはほんとうである。

しかも、そういう作品を含めて、第二に古典文学専門研究者、いわゆる国文学者の見方が固定してしまつてゐることが退屈さの理由としてあげられる。個々の作品の評価まで決定ずみのようである。ほんらい、文学作品の価値は、さまざまな視角に應じて異なるべきであるはずだが、国文学史では明治らしいほど決定してしまつて、ほとんど動きがない。動かそうとしても根底から動かそうというのではないから、五十歩百歩ということになる。江戸文学が古典研究の中に編入されたのは明治末年からのことであろうか。それにさえ、戦後のどの文学史を見てもほとんど同一の値札がぶらさがつてゐる。ただ戦時下に、志士の悲憤慷慨調に異常な高値がつけられたことくらいが例外であろう。この時の値札のつけかえに国文学者からも多く参加してゐたことをおぼえておく必要がある。

それはともあれ、このように作品評価が百年一日のごとく一定していること——新しい価値発見も、いつでも一定の、すでに価値の決定した作品についてしかおこなわれないということを含めて——は、国文学者が、かれらの取り扱う諸作品を文学として読んでいくのではなく、講義もしくは論文のためのたんなる材料として接していることを示しているのではなかるうか。文学として読んだら、もっと感動なり、もしくはつまらなければ、腹立ちなりが、文学史の中に表現されてよいはずだ。津田の論述には、それが出すぎるほど出ている。が、他の古典文学研究者は、与えられたものを、紙魚のうんこか、紙魚さえまずくて食い残したような愚劣な作品を、天から価値をさずけられたものとして甘受しているのか、そういう作品に対する非難、そういう作品を生みだした社会的芸術文学的環境にたいする抗議の声一つあげず、得々と、屁のような歌集や戯作を列挙しているのである。

しかもこういう従来の国文学史の底をつらぬいている思想は、日本独特の風流ではあるまいか。それはちよつと見には、芸術至上主義の一変種みたくに見えるけれどじつは政治による芸術の徹底的去勢と軽視、いいかえれば政治の絶対的支配と芸術の絶対的従属とに裏づけられている。たぶんこの思想のおこりは、江戸時代にあるだろう。

もちろん、王朝の物語でも中世の戦記文学でもかならずしも政治を無視しているわけではない。むしろ戦記文学のごときは、政治権力の争奪そのものが全篇のたて糸になっている。がしかしそれが文学芸術としてつかまえられるときは、ものあわれであり、無常感であった。そしてそれが徳川時代に芸術文学の主導的理念として固定されてしまったのである。風流とは、もともとわが国における被支配階級の政治的発言力の零状態の反映にほかならなかつたけれども、江戸の戯作者はもちろん、文

学研究者たちも甘んじてその状況をうけ入れて、文学を非政治下の創りものとする思想をみとめてきた。そしてそれが国学者その他を通して明治以後の国文学研究の基礎的思想を形づくってきている。たぶん国文学者でなかった津田左右吉以外には、ほとんどだれもその点を疑おうとした痕も見えないようである。

文学は政治と同一次元に属するものではない。が、しかし文学が国民生活・思想の中においてつくられるかぎり、政治から完全に遊離することは、クラゲかナマコ様の骨なしの、白痴文学をこしらえることになるだけであろう。文体そのものをとってみても政治経済論の論理的で説得的な力づよさは、風流文学の文体の中にはとうてい見出しがたい。文体は、もっぱらなよなよ、もしくはブヨブヨ、フワフワしているだけが文学的なのではない。にもかかわらず、今までの国文学的文学観の中には、そういう盲信が生きていた。

どこの国の文学史をとっても十九世紀の近代小説満開期以前には詩、随筆、物語だけでなく、近代文学がつくられるためのあらゆる要素、すなわちそれぞれの国語を美しく精錬するためにまた国民思想を成長せしめるために書かれたあらゆる種類の著述に重要な地位があたえられ、多くのページがしめられている。フランス文学史にはパスカルありフェヌロンあり、またデイドロたちの唯物論がとりあげられ、モンテスキューについても『ペルシア人の手紙』だけでなく『法の精神』が文学史の問題となつている。少なくともプレシユーズたちの艶色小説より重大な文学的問題であるはずだ。デ・サントキイスの名著『イタリア文学史』においても、マキアヴェルリやグイッチャルディニの政治史、政治経済論は大きな一章を占めて、片々たる詩や小説などほとんど相手にされていない。つまり文学

史は国民史、国民思想史の流れの中で正しくとらえられているのである。

これに反して、わたしたちの国文学史は、筆のすさびになった随筆や、型にはめてくりぬいただけの物語や、歌集や、あるいは愚にもつかぬ読本だの洒落本だのの栄枯盛衰にかなりのページがさざげられている。だが、それは文学史ではなく風俗史で取扱うべきことがらではないか。

それに反して、『神皇正統記』をさいごに、国民思想発展と国語文学の形成とに相当重要な役割をはたしてきたさまざまな政治、思想論や記録の類はいっさい無視されている。『神皇正統記』が取りあげられているのも、その文学性のゆえというより、南朝正統論と天皇主義という政治性のためにほかならない。ということは、『神皇正統記』より年代的に先んじて、いかに見ても文学的な高さにおいて高い親鸞や道元についてさえ、文学史が一言もふれてこなかったことで間接的に証明されよう。『往生要集』からはじまって蓮如『御文章』に閉じる一連の中世宗教文学は、同時代の物語や和歌よりはるかに重要な役割をはたしてきただけでなく、それをはたしうるだけの文学的質の高さをもそなえているはずである。それが国文学史によって今日まで顧みられなかったことは、江戸文学史における戯作および風流韻事限定につながっているのである。わたしたちがくつがえさねばならぬのは、そういう人間のごく一側面にしか立たぬ、いわば不毛な文学観である。

なぜかならそこをつらぬいているのは、さきに入った政治世界との完全な遊離の場、娯楽でなければせいぜい耽美だけを文学の対象とするという思想なのである。それは、さきにもふれたように、日本史そのものにもかなりつよく流れている傾向ではあるが、とくに徳川幕府の文教政策によって決定的に文学者および文学研究者に押しこまれたものである。したがって、その裏側には、もっとも露

骨な教戒主義、実利主義がひそんでおり、また機にふれて百パーセント政治主義ともなりうる。ものあわれの本居宣長の学が超日本主義の国学に分解していったこともその一つの傍証であろう。

わたしは、この百パーセント政治主義とシヤム双生児の關係をなした風流主義の文学観と文学史から脱けだして、貧しいながらも日本の古典文学を自分の手にとりもどきたいとねがっていたし、いまもねがっている。このねがいは、わたしひとりだけでなく、少なくともわたしと同世代の連帶的な念願ではなかつたらうか。二十五、六年まえ、よく寺田透とそういうことを希望として語り合ったことをおぼえている。めいめいが、それぞれ自分の目で、古典を見なおして、自分の日本文学史をつくることを。

しかし戦後、古典文学史には、新しい粧いはなされたにしても、同じ物語や詩歌や随筆をむしかえしているだけで、一こうに文学の根源的な世界に迫ろうとせず、本質的にはどうも変りばえがしないのではなからうか。民主主義的文学史家もさまざまな努力を重ねてきたけれど、旧来の文学史を根底から疑うということせず、かえって文化遺産の継承などという美しげなことばにまどわされたのか従来の文学の範囲をかたく守って破ろうとせず、したがって大本において革命的でも解放的でもありえない。風流韻事の文学観を捨てれば、政治主義に奔ったり、民俗学に偏向してしまいがちのようである。やはりそこにいま生きているわたしたち自身の文学という視点が欠けていることに変りない。

それには冒険と危険をとまなうけれど、その視点によって古典がとらえなおされないかぎり、日本文学史はいつまでも、わたしたちのものにはなりえず、永遠に灰色の退屈からまぬがれえないだろう。

岩波書店の「日本古典文学大系」は、注釈がたくさん付せられていることでは便利であったが、上のべた意味では、旧来の日本文学史をそのまま再確認した点でわたしには、きわめて不満だった。がこんど第二期三十四巻が増刊されることになって、いささかその不足がおぎなわれそうである。

だが全三十四巻の内容を一瞥すると、やはり二番煎じの感をまぬがれぬのはどうしてだろう。さきに行った宗教文学集の三巻とか『折たく柴の記』『近世思想家文集』などは、『栄花物語』などとともに、補巻として欠くべからざるものであろう。が漢文で書かれた詩集を三巻も入れることについては疑問がのこる。それは思想的には重要かもしれないが、文学史的には、プラスよりもむしろ国語文学の成長の足をひっぱる役割の方が大きかったのではなからうか。そしてその程度の文学的実質しかもっていないのではなからうか。先日も五山文学の一端をのぞいてみたが、少なくともそれ自体に文学的価値は発見できなかった。もともと『懐風藻』にしても『菅家文章』にしても五山文学や江戸漢詩にしても、もはや市場で容易に入手しがたいものばかりだから資料提供の意味は小さなものではなからう。

たぶん、こういうことになったのは、日本古典文学の貧しさのゆえであらう。が、それと同時に、従来の国文学者の文学観へのよりかかりというのか、妥協というのか、そういう歯がゆさも感じられる。しかし考えてみれば、こういう大出版は、わたしたちのような個人的冒険ですむことではないのだから、すでにできあがっている価値観に基いておこなわれるのが安全だし当然でもあらう。むしろ第二期の編成は、かなりの冒険がこころみられているといえるべきだろう。